

碩学の薫習の下で

石井 明

元横浜商科大学教授

■はじめに

2025年5月5日、会計研究関係の諸学会および会計・監査の実務界等を牽引してこられた古賀智敏先生は、石川県白山市（金沢市の近く）にある、直近の奉職先であった金城大学の経営学・会計学の教授講義二年目が開始された後、入院され突然帰らぬ人となりました。

5月6日、一切の前触れもなく、先生の急逝は伝えられ、同9日、私は兵庫県西宮市で行われた告別式に参列しました。先生とは昨年11月金沢市で先生と会食、また年末に先生が先導された出版企画のことで東京でお会いし、また今年に入ってから4月1日、会計に関することで私は先生に電話を差し上げて数分間話をしたばかりでした。それが先生との最後の意思疎通の機会となろうとは思いませんでした。

振り返ってみますと、先生からは1999年9月に開かれた日本会計研究学会の全国大会の日からこの度の逝去まで約26年間にわたって種々の示唆を頂き、またこの10年間程では時に率直に意見を申し上げたりしてご交誼を頂いてきたわけですが、突然お別れすることになってしまいました。

■古賀智敏先生のご経歴

東京銀行（現三菱UFJ銀行）時代、実務的な経験や会計や財務分析に関する本の執筆があったとはいえ、私は48歳に達して初めて日本会計研究学会に入会、研究業績も僅かな研究者が古賀先生を紹介するのは幾分身の程知らずであります。本追悼文を進める前提として、先生のご経歴を以下簡潔に述べておきたい。

先生は1971年3月に山口大学経済学部を卒業後、1973年3月に神戸大学大学院経営学研究科修士課程を修了された。その後、アメリカに渡り1976年8月にイリノイ大学経営大学院会計学修士を修了、日商岩井アメリカのシカゴ支店勤務後、ニューヨークにある監査法人（二法人）の監査部門・税務部門勤務を経験されました。神戸大学大学院では武田隆二先生のご指導の下、研究者としての強い期待を受けて古賀先生は帰国され、1982年4月に龍谷大学の助手に就かれ、その後短期間で教授に昇進、そして1992年4月に神戸大学経営学部

の国際会計論の教授に移籍・就任されたのでした。神戸大学の学部・大学院、さらに諸学会において蓄積した知見や指導力を発揮され、そしてその後さらに同志社大学、東海学園大学、近時に金城大学へ移籍、継続して会計関係学会等での圧倒的な活躍の様や存在感を示しておられました。

古賀先生が挙げてきた業績は全て先端的でありかつ広範囲に及んでいると言っても過言ではない。先生の研究実績の評価については日本会計研究学会等の研究理事の就任期間が長期にわたった点からも自明であろう。ここに以下綴る記述内容については、私が会計諸学会での活動を通じて古賀先生との関係で経験した4つの「意義深い」事柄に絞って述べてみたものである。

■日本会計研究学会大会

古賀智敏先生の聲咳に接することができたのは、私が東京銀行の関係会社に勤務せるなか、会計諸学会に入会し始めて約3年が経過した、私が50歳の頃に参加した日本会計研究学会でした。

1999年9月、京都学園大学（現・京都先端科学大学）で開かれた日本会計研究学会の第58回全国大会に私は参加致しました。初日、参加者のひとり、横浜国立大学・岡田依里先生（若杉明教授が主宰する企業会計研究会で懇意となる）から古賀先生を紹介して頂き、そして第三日目・四日目には、統一論題・第二会場「時価主義会計・監査の系譜と二十一世紀への期待」という部門の会場に向かいました。討論会場の座長は白鳥庄之助先生（成城大学）でした。同座長の下、古賀先生は「金融商品と公正価値会計」というテーマで、金融経済の発展と評価技法の進歩を背景として、金融商品、特にデリバティブの公正価値評価に焦点をあてた報告でした。それと同時に、今後の会計の論理を明快に説明し資産・負債アプローチによる近い将来の会計構造の必然性を明確に位置づけるものでした。

因みに、古賀先生のほかの報告者（登壇者）には、小宮山賢（朝日監査法人）、弥永真生（筑波大学）、笠井昭次（慶応義塾大学）の諸先生がおられ、当時の金融商品会計の先端的課題を研究し一定の成果を出された意欲満々の研究者の方々でした。

その大会以前において、私は東銀リサーチインターナショナル（東銀の関係会社）に在籍しており、為替予約、スワップ・オプション等のデリバティブ金融商品に関する公開講座の講師や税務当局への出講を自らの業務としていたことから、デリバティブ会計をどう説明すべきか、その会計理論に大いに興味を抱いていたのでした。

そこで、1998年頃でしたが、時価会計に関する、先駆的会計理論書を探したところ、古賀先生の執筆本『デリバティブ会計』（森山書店）が目に残りました。玩読後、取得原価主義会計を前提とした当時の監査は、将来どのように変革されるべきなのか、という問題に関心が及びました。それに的確に答えるような研究書を探したところ、同じく古賀先生が書かれた『情報監査論』（同文館出版）が公刊されているのが分かり驚いたのです。購入し読んでみて私は、古賀先生が会計および監査の二領域を隈なく考究している、一頭地を抜く研究者であろうと心底から感じたのでした。

私としては、1994年、海外駐在期間中に関節リウマチに罹ったことを契機として、銀行の行員から大学の教師を目指すことを決め、改めて会計研究に心血を注ぎだして、学会入会を重ね、会計研究学会の全国大会・統一部門に出席できたことは、私にとって好機でした。満座の会場で私は、古賀先生に対して私自身が抱いていた時価会計やその監査に係る疑問点を質問票に書いて出したのでした。

細かなことになりますが、その質疑応答の際、白鳥座長は私の質問を朝日監査法人（当時）の小宮山先生に振ろうとしたのでした。が、私はこの質問は『情報監査論』の執筆者である古賀先生に対して出したものであり、「是非とも古賀先生のご意見を伺いたい」という言葉が口について出てきたのでした。

学会終了後、大分月日が過ぎた頃、森山書店から郵便が来て、雑誌『会計』に関する統一論題の討論会の発言記録の添削をして送り返しました。この時の二度目の感激のことは今でもよく覚えています。

■学会スタディ・グループ

古賀先生は先の全国大会以降、いろいろな分野の研究に着手され、神戸大学の研究仲間を中心として共同研究に取り組みられ研究成果を続々と公表されました。例えば、「統合報告」のような先端領域を早い段階で真正面から取り組み、全体像を示すと同時に、論点を噛み砕いて報告することを成し遂げている古賀先生の姿がありました。まさに破竹の勢いの「古賀先生の存在感」に圧倒されたことを思い出します。

そのような状況の下、私にとって印象的であったのは、米国財務会計基準審議会（FASB）が公表した調査報告書『デリバティブ会計とヘッジ戦略』（川崎照行先生共訳・東洋経済新報社、2000年）の上梓でした。私は勤務先の公開講座でのデリバティブ会計に関する解説の仕事があって、既に原書を購入し自力で翻訳に励んでいたのです。その翻訳本の訳とその時点までの

自分の訳を比較して、私は自らの訳文に自負心を持ったことを記憶しています。

加えて、日本会計研究学会のスタディ・グループに基づく報告書『各国におけるデリバティブの会計・監査及び課税制度に関する総合研究』（2003年）が圧巻でした。2001年であったと思いますが、先生は大阪学院大学で開かれた学会での研究報告に先立ち、その直前に私にファックスでの資料送付及び電話連絡があつて、当日質問せよとの依頼でした。これには正直驚き緊張して、時価評価に関してキーとなるであろうと思う事項を訊くことに決めました。当日、一番に手を挙げて質問。私の質問が予想外であつたようで回答者がいないという状況となり、古賀先生が自らの意見を開陳されました。大会終了時、私がロビーに居たところ、古賀先生が私を見つけて「良かった。ありがとう」と声を掛けて貰ったことが脳裏に刻まれて、私はその後の学会活動に大いに気合が入ることになったのでした。

■国際会計基準

翻訳案件は原書の執筆者が高名であることがまずポイントであるが、また出版事情もあるので出版社との深い関係を有する、著名な先生との共訳が必要不可欠である。

2006年9月、早稲田大学の川村義則先生とは、京都学園大学の全国大会で初めてお会いして以来、故新井清光教授関連の早稲田大企業会計研究会に参加しだし、また同学部に勤務していた広瀬義州教授（2016年逝去）との因縁もあつて、川村先生とはかなり懇意となつていたのでした。私の横浜国大の博士号取得が見込まれる段階、2006年5月において共監訳の翻訳本を選び出す旨を予め打診した。8月、同志社大学で開かれた国際会計学会大会の場で、国際会計基準に係る本、George J. Benston, Michael Bromwichら計4人による共著、“Worldwide Financial Reporting”(2006)を選定して川村先生経由で中央経済社に持ち込んだのでした。これは3カ月後に翻訳権取得が決定、その後、2009年の春に『グローバル財務報告』（中央経済社）として首尾よく発刊するに至りました。

次いで、古賀先生との関係で、もう一冊の同種翻訳プロジェクトに着手することになりました。川村先生との翻訳案件成立から数か月後、丸の内にあった丸善書店本店の外書コーナーにおいてオーストラリアにある Monash University に奉職している学者 Godfrey & Chalmers が編纂する“Globalisation of Accounting Standards”(2007)を発見したのでした。一見すると、その本は欧州主要国で適用される国際会計基準に関する世界規模での国を代表する学者の論文を集めたもので、日本からは古賀先生が論文を寄せておられました。先生は執筆者の一人であることから、本全体に対する翻訳を編集者に申し入れ、既に翻訳権を取得済みであろうと推察し

た。その翻訳の一角に入れて貰えまいかと考えて、私は古賀先生宅に電話を入れた。ちょうど先生は自宅におられ、翻訳を一緒に手掛けようかと私に申し出られた。

電話から約2週間後、新大阪駅の近くのワシントン・ホテルのロビーでお会いし、翻訳出版を請け負う出版社を決めることになった。これは古賀先生が懇意にされている同文館出版に頼むことになった。古賀先生からは、後日、五十嵐則夫教授（横浜国大）も監訳者の一人となることを告げられた。古賀先生の神戸大学門下生や早稲田大学出身の福島隆先生（明海大学）などの人たちを訳者として選抜し私がほとんどの部分の監訳者を務めることにした。

キックオフ・ミーティングは神戸大学の東京六甲クラブ（有楽町）の場所を使い、私が作成したレジュメに基づいて実施。そこに、古賀先生の方針や補足の話が加えられて、約2時間にわたり行った。参加者は翻訳予定者の5名ほどであったと思う。翻訳者が京都や名古屋にもいたために私が夏季休暇時に各地を回って疑問点や修正点の確認を行った。そして2008年、神戸大学において古賀先生と門下生とで最終的な訳文チェックを実施した。この案件は『会計基準のグローバリゼーション』（同文館出版）として2009年に出版となった。

■国際会計研究学会

学会活動は3年毎か、学会の選挙で選出される会長および理事等によって運営される。私が上武大学に奉職していた2011年の夏、学会の知己、吉岡正道先生（東京理科大）から突然手紙が来て、私を推薦する人が結構いるので、一緒に立候補しないかという誘いを受けた。それまで私は研究専一方針で、学会の運営側の職務には興味も野心もなかったが、当時、学会には6団体、10年以上在籍、学会報告は10回程実施、また国際会計基準に関する翻訳書（前述の監訳書）も上梓しており、また民間企業での実務経験のある私が貢献できる部分もあるだろうし、今回は敬愛する古賀先生が会長に立候補されることを聞いていたので、誘いに応じて理事に立候補することにした。結果は国際会計研究学会（会員数約500名）の選挙で、古賀先生は順当に会長に選出され、また私は理事に選出されることになった。先生とともに会計研究の発展に尽くすことができると思うと大きな喜びを感じた。

その後、何回目かの理事会の懇親会かの時に、次年度に開催する東日本部会の大会の委員長に私を指名するという話が来た。しかし当時私が所属していた上武大学は、首都圏から離れた地方大学であり、また学会員は私だけ、補助・案内ができる学生はほぼいないという理由で、別の首都圏にある大学にして欲しいという返事をした。しかし、数か月後、他校での開催受け入れが難しいとして、古賀先生等から再度の要請があり、菊谷正人（当時、国土館大学）理事

から母校の大学院にいる弟子数名を派遣するという確約を得たことから受け入れた（本務校の庶務係からの支援はほぼなく、離れた場所での懇親会場の決定からバス手配等の全てのことに孤軍奮闘した）。研究大会に加えて、終了後の懇親会の司会担当、さらには、論文のコメンテーターも私が担当することになった。大会懇親会の乾杯の音頭については、伊東市にお住いの中島省吾先生（日本会計研究学会および国際会計研究学会名誉会長、国際基督教大学名誉教授、当時 90 歳）に電話を差し上げ、ご快諾を得て、大会会場のある高崎市にホテルの手配をした。

2011 年 9 月に開催された大会前夜、中島先生、古賀会長、島永和幸先生（神戸学院大学）と宿泊ホテルの近傍にあった居酒屋で夕食をご一緒した。古賀先生や私から中島先生に幾つかお話を伺ったところ、アメリカのペンシルヴェニア大学留学での研鑽の様子、および Paton & Littleton 共著『会社会計基準序説』（原書 1940 年）の翻訳は同大学で師事した Rufus Wixon 教授（Paton の弟子の一人）に先生が申し出られたことを拝聴した。

研究大会は 40 名ほどの参加者を得て終了し、その後送迎バスで懇親会場に送り届けて貰い、予定通りに中島先生に乾杯の音頭を取って貰った。よってほぼ不手際もなく終了することとなった。

そして復路の JR 高崎線では、大会進行のために大学内で動いて貰った依田俊伸先生（法政大学）と菊谷先生と車中のボックス席で安堵の中で交わした「感想戦」は、今日まで脳裏に強く残っている。

■近年の交流

近年の出来事としては、2018 年 3 月、私が上武大学から移籍後の大学、横浜商科大学における私の最終講義に古賀先生にご出席いただき先生に過分なスピーチを頂いたことは大変有難く極めて印象深い。

その後は、私の長年にわたる関節リウマチによる膝関節手術を受けたり、またコロナ禍があって、会計研究が停滞したりで、電話で話をする以外はお目にかかる機会があまりないままであったが、2023 年の年末、拙稿『鉄道リース会計における資本化の考察—20 世紀前半期に創造されたリース資本化論—』（2023 年）という論文の抜刷冊子をお送りしたことから、直ぐに古賀先生からの電話を頂き、2024 年 9 月名古屋大学で開催された、グローバル会計学会の特別講演として「リース会計史研究への道」を幸いにも披歴することができた。その大会の前日、古賀先生と久しぶりの再会を果たしたのであった。

だが、巨星墜つ。碩学で開拓魂に溢れ常に一步先行を果たしてきた「壮心已まない」古賀先生が他界されてしまわれた。

先生に対する私の評価・印象を最後に述べることにしたい。先生は学識が豊かであることは遍く知るところであるが、アメリカでの約5年にわたる修業や実務経験がまず基礎にある。加えて、先生は研究意欲が並外れて高く、直接の同門研究者だけでなく、周りの研究者や実務家に対しても大いに奮起を促すとともに、新たな知識の吸収が頗る早くできる人であったと思う。先生の高潔な人格、未踏分野に対する強い挑戦意欲、およびその鋼のような実行力、さらに学者をはじめとしたいろいろな人に対する指導力や影響力は、先生生来のものであったように私は思う次第である。ご冥福を祈るしかない。合掌

令和七年六月二十日 東京にて



国際会計研究会大会、故人となられた古賀会長と筆者。2011年、東京理科大学寄居キャンパス